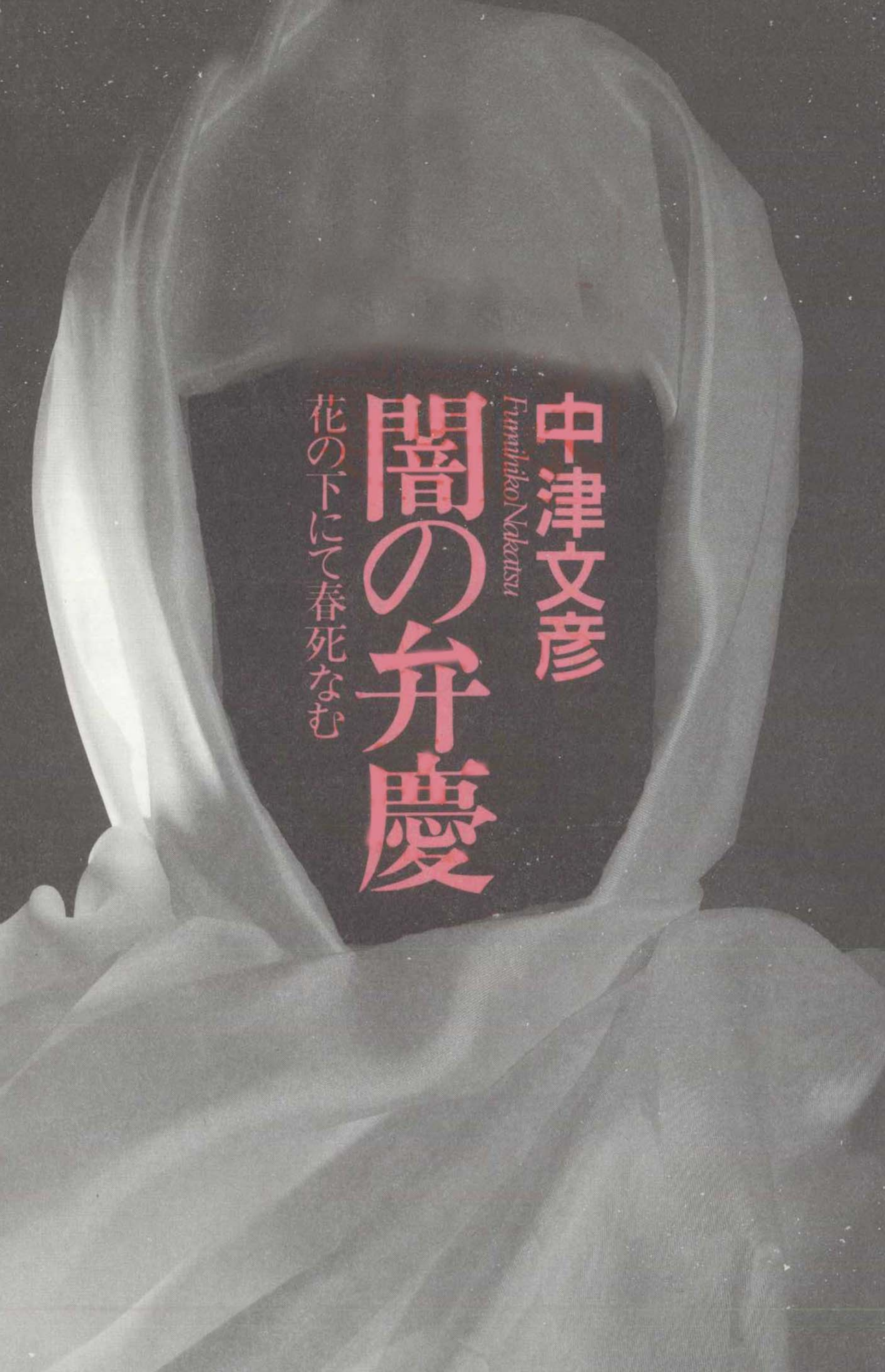
中津文彦
Fumihiko Nakatsu
花の下にて
春死なむ
闇の弁慶


中津文彦
Fumihiko Nakatsu
闇の弁慶
花の下にて春死なむ

長編歴史推理　闇の弁慶　花の下にて春死なむ

平成２年６月20日　初版第１刷発行

著　者　中津文彦
発行者　伊賀弘三良
発行所　祥伝社
〒101　東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03（265）2081（営業）
☎ 03（265）2080（編集）

印　刷　堀内印刷
製　本　ナショナル製本

万一，落丁・乱丁がありました節は，お取りかえします。
Printed in Japan.
ISBN4-396-63016-6 C0093
© Fumihiko Nakatsu　1990

闇の弁慶

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

プロローグ　7
第一章　義経を確保せよ　12
第二章　平治の乱　50
第三章　清盛と海　90
第四章　秀衡と十三湊　110

第五章　京都騒乱　127
第六章　法皇の陰謀　165
第七章　挙兵前夜　185
第八章　以仁王（もちひとおう）の令旨（りょうじ）　214
第九章　頼朝（よりとも）の猜疑（さいぎ）　247
第十章　行方（ゆくえ）も知らぬ　281

装幀・辰巳四郎

プロローグ

武蔵坊弁慶の名が広く知られているのは、言うまでもなく義経と主従関係にあったためである。悲劇の英雄、義経の側に常にピタリと寄り添い、大薙刀を構えた僧兵姿の雲つくような大男、というイメージがわれわれの頭の中にはすっかり出来上がっている。北海道から九州まで、弁慶にまつわる伝説の類を合わせれば百や二百ではきかない。義経だけではなく、家来の弁慶のほうもれっきとした国民的英雄なのである。

ここまで弁慶の存在感を高めたのは、歌舞伎十八番の一つである『勧進帳』によるところがきわめて大きい。あの安宅の関の名場面を知らない人はいないだろう。この出し物が初めて演じられたのはそう古いことではなく、百五十年前の天保十一年（一八四〇）、江戸・河原崎座でのことだった。主役の弁慶を演じたのは当時の大スター市川海老蔵だったが、初日から爆発的な人気を呼び、たちまちにして当たり狂言の第一となった。そして、その後さらにこれを国民的な芸能にまで高めたのは、七世松本幸四郎だろう。彼は大正から昭和の初めにかけて、千六百回以上もこの狂言の弁慶役を演じたと言われている。

これほど日本人の間にすっかり定着した感のある弁慶が、はたして歴史上実在した人物かどうか曖昧だということは、いささか不思議な話である。なぜそういうことになったのだろう、という疑問を私は昔から抱いていた。実在が疑問視される理由はきわめて明快である。信頼すべき史料にその名が出てこないからなのだが、それなら国民的英雄にまで高められた弁慶像は、まったくのフィクションによって作り出されたものなのか。そんなはずはなかろう。

〝信頼すべき史料〟なるものの中に、実は弁慶の名がたった一カ所だけ登場する。鎌倉幕府の公用日記『吾妻鏡』の文治元年（一一八五）十一月三日の項に、「伊予守義経ら西海に赴く」という記述がある。この年の三月に平家を壇ノ浦に敗った後、兄頼朝との対立が決定的となって義経主従が京から落ち延びていくくだりだが、付き従う八人の家来の中の一番最後に「弁慶法師」という名が出てくるのである。実在説を主張する人たちにとっては、これだけがよりどころとなっている。

では、なぜ実在を疑問視する向きがあるのだろうか。その理由は主張する人々によってさまざまなのだが、伝えられる弁慶像があまりにも豪快で派手なために、それほど大活躍した人物ならもっと史料に登場してもよさそうなものだ、という観点から、おそらくそれはフィクションであろうという判断を招き、さらにその延長線上で、存在そのものを否定的に見る傾向が強まったもののように思える。

弁慶の実在をめぐる賛否両論は、どこまで戦わせても水かけ論にしかならないだろう。史料が乏しい、ということが決定的だからである。だが、この「史料が乏しい」ということが実は曲者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

の場合がある。時の為政者にとって不快なこと、都合の悪いことなどが、歴史上の記録から抹殺されてきた例は、古今東西を通じて数え切れないほど多いからだ。

　いわゆる『正史』と呼ばれるものは『社史』に似ている、と表現したある歴史研究家がいるが、私はまさに当を得た言い回しだと思っている。

「先代の社長が亡くなった後、専務派と常務派が激しい抗争を繰り広げ、その結果、専務派の追放に成功した常務が現在の社長である」などという記述は、どんな会社でも絶対に社史には載せないであろう。しかし、『史実』というのは、そういうことを指すのである。

　譬え話をもう少し続けると、社長の跡目争いに敗れた専務派が悔しさと怨念を込めて、一方的に自分たちの立場から（つまり客観的にではなく）何かを書き残したとする。あるいは社員たちのヒソヒソ話で抗争のあったことが語り継がれたとする。そうした〝史料〟や〝伝説〟は、とても全面的に信用したり鵜呑みにすることはできない。しかし、実際に行なわれた激しい抗争にいっさい触れていない『社史』よりは、『史実』を知る上ではるかに大きな手がかりになるだろう。歴史推理のロマンはそこにあると言っていい。

　弁慶に話を戻そう。

　もし彼の存在が鎌倉幕府によって抹殺に等しい扱いを受けたのだとしたら、それはいったいなぜだったのだろう。この物語の発想はここから始まった。

　後世に伝えられた弁慶像は、室町期に作られた『義経記』を源流としている。ここから謡曲や浄瑠璃、草双紙さらに講談から歌舞伎へと流れ、広がっていったのである。もちろん、その流

れはしだいに大きく膨らんでいったに違いないが、源流である『義経記』の記述もはたして根も葉もない荒唐無稽なものなのだろうか。長いこと語り継がれていた人々のヒソヒソ話を集めたものだとは考えられないのだろうか。『義経記』は全八巻からなっているが、そのうちの第三巻は、弁慶の出生から義経との出会いまでについて述べており、それ以外の巻でも常に主役の一人として登場する。これは『義経記』ではなく『弁慶記』だ、という人さえいるほどである。

為政者が歴史記録から抹殺したい第一は、反逆者の存在である。これも古今東西を通じて不変の原則と言っていい。権力者にとって、自分の座を脅かし奪おうとする者ほど不快な存在はないだろう。従って、そうした者たちは徹底してその存在も記録も抹殺される。逆に権力を奪い取った者のほうも、場合によっては抗争の事実を隠す。鼻高々と政権奪取の成功談をぶち上げてもよさそうなものなのに、なぜか隠す場合がある。怨念、怨霊の世界に扉を閉ざしたいという願望のなせるわざなのだろうか。

兄頼朝からあれほど憎悪された義経なのに、その名前は頻繁に記録に登場する。もちろん、それは義経の活躍があまりにも華々しく、無視、黙殺のできないものだったせいもあろう。従って義経が歴史上に実在したことを疑う者はいないが、それに比べて、もし弁慶の名が抹殺に近い扱いを受けたのだとしたら、あるいは頼朝や鎌倉幕府にとって、義経よりも弁慶のほうがずっと不快ないまいましい存在だったということなのか。もしそうだとしたら、それはどういうことだったのだろう。そう考え始めたときに、この物語が少しずつ幕を開けていった。

歴史ミステリーを書く場合の原則は、歴史上の出来事や登場人物をすべて取り込むことだと思

っている。ストーリーに都合の悪い部分はカットする、というのではフェアとは言えない。すべてを取り込んだ上で推理して構築した部分が、ピタリと当てはまるようなときはまさに冥利(みょうり)に尽きるわけだが、この物語では、八百余年前のさまざまな出来事（例えば、清盛(きよもり)や後白河(ごしらかわ)法皇の行動などのほかに、京の市内で起きた事件や火災、流言などのようなものも含めて）が面白(おもしろ)いように当てはまった。私が弁慶ならこの時期にこういうことをもくろむんだが——などと思いながら史料を漁(あさ)っていくと、まさにそういう出来事が起きていたりしたことも何度かあった。書き進めていくうちに、もしかすると弁慶が〝闇の殿〟の指図に従って、この一大事を企(たくら)んだのは本当のことだったのではないか、と私は思い込むようになってきた。

そう、この物語には〝闇の殿〟と呼ぶナゾの人物が登場するのである。この人物の平家打倒にかける執念が物語の原動力となる。それはいったい何者なのか、という、whodun'it(フーダニット)（犯人当て）の醍醐(だいご)味も楽しんでいただきたい。その正体は、最後のページで明らかにしてある。

第一章　義経を確保せよ

1

若狭湾の奥深く、小浜に近い松ヶ崎の沖合に一隻の船が静かに滑り込んで来た。そう大きな船ではない。帆柱は一本、三十石ぐらいだろうか。

あたりには、濃い闇が漂っていた。すでに亥の刻（午後十時）に近い。上空に微かな星の瞬きは認められるが、月の光はない。目の前に黒々と広がる陸地も微動だにせず、風波草木すべてが眠りについていているような静けさに包まれている。

波間に船足が止まると、舷に一隻の小舟が下ろされた。

「首尾よく参られよ、武蔵坊どの」

甲板に立った船頭らしい男が、小舟に乗り移ろうとしている影に声をかけた。

「承知いたした。かたじけのうござった」
縄梯子に足をかけながら、武蔵坊と呼ばれた僧形の男は小さく頭を下げた。身にまとった粗末な僧衣が初夏の生暖かい空気にヒラヒラとなぶられている。

そのまま男は身軽に小舟に乗り移った。小舟にはすでに櫓を操る水夫が艫にいて、猿のような身のこなしでもやい綱を解くと、スイと陸地に向かって漕ぎ出した。

たちまち眼前に松ケ崎の浜が近づいた。切り立った岩場や崖を避け、わずかに平らな岸を見つけて水夫は小舟を寄せた。男はヒラリと飛び下りると、一つうなずいてみせてから背を向けた。

スタスタと歩み去る足運びは驚くほど速い。明らかに充分な習練を積んだ者の身のこなしである。その後ろ姿は、たちまち闇の中にかき消えてしまった。

雲つくような大男である。身の丈は六尺（約一八〇センチ）を越えていよう。胸分厚く、僧衣の裾からはみ出した両足は松の根のように太く、草鞋は一尺に近い。網代笠を深々とかぶり、笈を背負い、金剛杖を手にしたこの男。名は武蔵坊弁慶という。

何度か歩き慣れた道らしく、灌木や藪の生い茂る中を延びている微かな筋を辿って、弁慶の足は迷わずに闇の中を進んでいった。やがて小山を越えると、人里に出た。人家が寄り集まり、わずかな耕地の広がるあたりを通りすぎると、街道が夜目にも白く浮かび上がる。そこまで来ると、弁慶の歩速はまたいちだんと上がった。

まるで空を飛んでいるようだ。時折り、ハッ、ハッと大きく息を吸い、そして吐く。もちろん息を切らしてのものではない。体内の燃焼機関を全開させるための修験者独特の呼吸法なのだ。

小浜から東南へ延びる若狭街道を保坂の集落まで来ると、弁慶はそこから右へと折れた。真っ直ぐに今津まで出て琵琶湖畔の西近江路を南下するよりは、ここから比良の山地を縦走する脇街道を行くほうが京都には近い。山間の道は狭く険しいのだが、弁慶にとっては何ほどのこともなかった。

風もなく、森閑とした山道には弁慶の発する呼吸音だけが響いた。さすがに全身から汗が吹き出す。が、その顔は意外にも涼しげである。

二刻（約四時間）余りすぎると、弁慶は背中の笈から竹の皮に包んだものを取り出した。赤ん坊の頭ほどもある握り飯を手に、足の運びはそのままにたちまち二つ平らげた。谷間の集落をアッという間に通りすぎる。朽木の杣、と呼ばれる木材の供出地である。

いくつもの山を越え、谷を渡り、花折峠を越えるころには東の空が白々と明け始めた。ここからは下りになり、やがて大原の里。もう京都の郊外である。弁慶はここまで来ると、山間の小道へと街道から右にそれた。

京都の市街地から真北に鞍馬山がある。標高はわずか六百メートル足らずだが、谷深く、鬱蒼とした老木に覆われ深山幽谷の趣を今なお止めている。鞍馬寺はそんな中に荘厳なたたずまいをみせていた。

山上に近い本堂までは九十九折れの石段が続き、その左右の山腹や谷間の沢には夥しい数の庵や僧坊が点在している。それぞれに大衆、堂衆と呼ばれる僧形の男どもが大勢住みついている。あくまでも僧形の男ども、である。僧とは限らない。そんな世の中だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c